

マリコ

MARIKO

柳田邦男

新潮社





マリコ

MARIKO

柳田邦男

新潮社

マリコ

定価1000円



発行 昭和55年7月5日

28刷 昭和56年10月30日

著者 柳田邦男

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

業務部 (03) 266-5111

電話 編集部 (03) 266-5411

振替 東京 4-808

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

© Kunio Yanagida, Printed in Japan 1980
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

マリコ ■ 目次

プロローグ	7
黄色いバラ	11
上海	21
銃声	28
忍びよる影	38
暗号	48
開戦	57
抑留	69
三万三千キロ	84

ニニギミノミコト 96

蓼科 107

天皇の通訳 119

別離 129

訃報 135

セレナーデ 144

結婚 153

『太陽にかける橋』 166

敗北 177

フロンティア 183

新しい「かけ橋」 191

カム・ホーム、アメリカ 199

塙塙の中で 215

終わらない旅 227

*

あとがき 241

マ
リ
コ

深い感謝をこめてK・Yに捧げる

プロローグ

ワシントンの秋は、美しい。

小バリとして設計されたこの都市の、放射線状に伸びる街路沿いの櫟や銀杏やプラタナスが、しつとりと色づいてきて、深みのある落着いた雰囲気をかもしだす。

だが、この年——一九四一年（昭和十六年）秋のワシントンは、そうした街のたたずまいとは裏腹に、太平洋戦争の開戦前夜の緊迫した空気につつまれていた。

春から、駐米全権大使野村吉三郎と大統領フランクリン・ルーズベルトおよび國務長官コーデル・ハルの間で続けられていた日米交渉は、双方の国益が真正面からぶつかり合ったまま、共に譲らず、坐礁寸前の状態になっていたのだ。

日本は中国大陸での戦争の行き詰りを打開するため、仏領インドシナにまで軍を進めていた。アメリカはこれらの地域からの日本軍の撤退を強く要求していた。

すでにヨーロッパでは、ナチス・ドイツと連合国の間に戦争が開始されて二年経ち、ヨーロッパのほとんど全域で、

苛酷な戦闘が展開されていた。

戦乱は太平洋にまで拡大するのか。日米両国は、戦争か平和かのぎりぎりの瀬戸際に立っていた。

東京の外務省とワシントンの日本大使館の間で、頻繁に電報や電話が交わされた。国運を決する外交交渉の連絡だから、通信はすべて暗号で行なわれた。

そのとき太平洋を行き交った暗号の中に、

《マリコ》

というキイ・ワードがあった。

このキイ・ワードは、日本の交渉方針や提案に対するアメリカ側の態度についての情報を連絡するときに、《米側態度》という用語に符合する暗号として、用いられたものだった。

「《マリコ》は病気だ」

と伝えれば、それは、

「《米側態度》は悪化している」

という意味だった。

なぜ、《マリコ》という女性の名前が、暗号に使われたのか。《マリコ》が、とくに《米側態度》に符合する暗号として採用されたのは、なぜなのか。

実は、《マリコ》は、実在の九歳の少女だったのだ。

寺崎マリ子——が、その少女の名だった。

父は寺崎英成といひ、ワシントンの日本大使館の一等書記官として、野村大使を補佐する立場にあった。母はテネ

シー州出身の生粋のアメリカ人で、グエンドレンといったグエンドレンは、自ら短くグエンと呼んでいた。マリ子は、日米国際結婚をした外交官夫妻の一粒種だったのである。

マリ子の名を暗号に用いることを思いついたのは、英成の兄で外務省アメリカ局長をしていた寺崎太郎だった。

寺崎兄弟は、アメリカとの戦争回避を願っていた欧米派の外交官だった。とりわけアメリカ人を妻に持つ英成は、公的にも私的にも、日米協調を強く願っていた。太郎はそうした弟の思想を支持していた。

暗号名の『マリコ』は、太郎が二つの国の血が流れている愛くるしい姪の名に、戦争回避の願いをこめて用いたものだったのだ。その事実を、現在記憶している人はほとんどいなくなっている。

その頃、マリ子は自分の名が日本の命運を決めるほど重大な極秘電に使われているなどとは、まったく知らずに、ワシントンのアパートからアメリカ人のパブリック・スクール（公立小学校）に通っていた。

黒い大きな目に黒髪のマリ子は、長身の両親に似て背がすらりと高く、パブリック・スクールでの生活にすっかりとけこんでいた。

だが、その年の十二月七日（日本時間で八日）、日本軍のパール・ハーバー（真珠湾）奇襲攻撃によって、マリ子の生活は破局を迎えた。在米日本人は強制収容され、やがて交換船で日本に送り還された。青い目のグエンも、夫と行動を共にし、アメリカ軍による空襲が激化し、鬼畜米英の声がみなぎる日本で、苦難の生活を送らなければならなくなった。

そして、マリ子のその後はどうなったのか？

それから三十五年後の一九七六年（昭和五十一年）七月、酷暑のニューヨークで、新人ジェイムス（ジミイ）・カーターを民主党の大統領候補に選出するための民主党全国大会が、開かれていた。

この年の秋に予定されていた大統領選挙は、ニクソンのスキャンダル、ウォーターゲート事件以後、すっかり人気を失ってしまった共和党から、民主党が政権を奪い返す絶好のチャンスだった。

民主党全国大会の会場であられた巨大な円形の建物マディソン・スクウェア・ガーデンは、全米から集まった代議員や報道陣など数千人で埋めつくされ、まるでカーターが大統領に当選したような熱気につつまれていた。

そして、五十の州の代議員席を示すボールや、カーター

支持のブラカードなどが林立する会場の最前列中央、ちょうど演壇の真下に、アメリカでいちばん人口の少ない西部ワイオミング州の代表団席があり、その席の一角から、演壇に拍手を送ったり、自州の議員の意見調整に忙しく動きまわったりしているすらりとした女性の姿があった。

日によって、白地に赤と紺の縁取りラインを入れたトリコロールのスーツで盛装したり、渋いブルーのツーピースを着たり、毎日衣装にせいぜいっぽい意を用いている彼女は、最前列のワイオミング州代表団の中で、際立って目立っていた。

彼女の名は、マリコ・ミラーといった。

彼女こそ、かつての寺崎マリ子だった。彼女は、戦後母とともにアメリカに渡って、民主党リベラル派（進歩派）の弁護士メイン・ミラーと結婚し、アメリカ国籍を得て、マリコ・テラサキ・ミラーとなった。そして、自らも政治運動に入って、いま、ワイオミング州民主党政務委員長の地位を占めるまでになっていたのだった。

黒い髪にはふっくらとしたウェーブがかけれ、鼻筋の通った顔立ち、長身のスタイルとともに、知的な美しさをただよわせていた。

ベトナム反戦や女性解放に、積極的な発言をしてきたマリコの政治思想が、鮮かに表明されたのは、副大統領候補

選出の日だった。

カーターは、副大統領候補としてリベラル派の上院議員モンデールと組むことを表明していたが、党大会では、徴兵忌避運動の青年フリッツ・エフューも、少数派から副大統領候補に立候補していた。

エフューの支持演説のために壇上に上ったのは、車椅子のベトナム帰還兵で、破壊された青春の記録『七月四日に生まれて』（邦訳『七月の寒い朝』）の著者であるロン・コビックだった。

「十二年前、私が十八歳のとき、私は海兵隊に入隊しました。国のために仕え、よきアメリカ人になったのです。私はアメリカの独立記念日である七月四日に生まれたことを誇りに思っていました。

そして、最初のベトナム派遣から帰国したとき、若者たちが徴兵カードを焼き、デモ行進をするのを見て、私は憤り、彼らに『売国奴』という言葉を使ってみたものでした。

再びベトナムに派遣された一九六七年十月、解放地区付近の戦闘で、私は人影を見つけ、銃弾をあげて、殺しました。死体を引きずり出したとき、何とそれは仲間の一人だったのです。私は茫然となって立ちすくみました。またある夜、グリラを待伏せしていたとき、私の部隊は誤って罪のない一般のベトナム人たちに射撃を加えてしまいました

た。死体の中には、子供も二人含まれていました。部隊の仲間たちは、衝撃のあまり、ライフルをたたきつけ、水田に坐りこんで、泣いたものでした。……」

ロン・コビックは、その後右足を撃ち抜かれて、本国に送還され、傷だらけの青春の中でしだいに反戦思想に傾いて行った白らの遍歴を語り、最後に次のように結んだ。

「そして今夜、私は誇りをもってフリッツ・エフューを合衆国副大統領候補に推薦するものであります。

ウエルカム・ホーム、フリッツ！」

フリッツは徴兵を逃れるために、六年間ロンドンで働いていたが、この日帰国したばかりだった。そのフリッツを、ロン・コビックは「ウエルカム・ホーム」と叫んで、歓迎したのだった。演説が終ると同時に、フリッツは壇上に駆け上り、車椅子のロン・コビックと抱き合った。

会場から拍手がわき起こり、「アムネステイ」の横断幕を掲げた若者たちが、代議員席の間をゆっくりと移動した。南部の右派から若い反戦グループまでを幅広く包含する民主党ならではの光景だった。

そのとき、最前列のマリコは、さっと立ち上ると、若者たちを支持する言葉を走り書きした揭示用紙を、両手に掲げて、会場の四方に示し、声援を送った。

マリコは、政治的にはモンデールに投票することを決め

ていたが、アムネステイの若者たちに対しては、全面的に拍手を送るのを惜しかなかった。マリコはいまや夫のメイン以上にリベラルな活動家になっていた。

パール・ハーバーの日に、ワシントンで恐怖におののいた少女が、アメリカ市民権を得て、民主党の有力な活動家になるまでに、いかなる遍歴があったのだろうか。

マリコが日本の友人に送った手紙の中に、次のような一節がある。

「夫と私は、長年アメリカの政治運動に参加してきましたが、その大部分は苦しい闘いの連続でした。……」

マリコの波瀾に満ちた半生をたどると、激動する現代史のうねりに、いつも真正面からぶつかってきた一人の女性の像が、浮び上ってくる。そのマリコの人生は、父と母の時代と一体となって形成されている。マリコについて記すには、両親の時代まで遡らなければならない。――

黄色いバラ

小さな偶然の重なり合いが、互いに異邦に生まれた二つの若い人生を一つに結ぶドアの鍵を、小さな音をたてて開けようとしていた。

一九三〇年（昭和五年）十二月のことだった。

その日、寺崎英成とグエンドレン・ハロルドがはじめて出会うことになる親善パーティが、ワシントンの日本大使館で開かれようとしていた。

冬のワシントンの日暮れは早く、辺りは夕闇にとざされようとしていたが、マサチューセッツ通りにある日本大使館の門は開かれ、正面の二階建本館には煌々（こうくわ）と明りがともされて、開放的な雰囲気がかもし出されていた。

グエンの乗った叔母の車は、石畳の上を、ゆっくりと大使館の構内に入ると、日の丸の旗の立った前庭の芝生の左を回って、正面玄関に着いた。簡素な様式の本館は、玄関の真上に、小さなベランダがあって、その手摺（てすり）には菊の御紋が飾ってあった。

グエンは叔母と共に、好奇心に満ちた気持で、玄関から

館内に入った。グエンは、日本という国について、ほとんど知識を持っていなかったし、まして日本人に会うのは、この夜がはじめてのことだった。

グエンが日本大使館のパーティに出ることになったのは、まったく偶然のチャンスからだった。

彼女はアメリカ南部テネシー州の東のはずれ、アパラチア山脈の山並の中にある小さな町ジョンソン・シティで生まれ、そのまま育ったまだ初々しい娘だった。父は会社員で、グエンの下には弟ビルと妹ドロシーがいた。アメリカの東部から南部にかけて連なる長大なアパラチア山脈のほとんど南の端になる東テネシー帯は、標高二千メートルを越える山もあり、起伏の多い山地である。しかし、緑と湖と川が豊富で、さまざまな野生の動物や小鳥や魚の生息する美しい自然に恵まれ、ローム層に覆われた土地は穀物の豊かな収穫をもたらした。

そういう環境の中で育ったグエンが、ワシントンに出かけたのは、ワシントンに住む叔母から、都会の生活や文化に触れたほうがよからうと、招かれたからだだった。グエンは二十三歳だった。叔母は社交界にも顔が広く、ある日、フランス大使館と日本大使館の二つのパーティの招待状を手にした。ところが、二つのパーティは同じ日になっていた。叔母は、日本のパーティのほうがめずらしい活け花や

着物や調度品を見られるから面白いのではないかといって、グエンを連れて出たのである。

グエンは日本大使館の玄関をくぐったとき、この目が、自分の生涯を決めるきつかけになるとは、夢にも思わなかった。ただ漠然と、東洋的なものを見ることができるという期待感に胸をふくらませていただけだった。

館内に入ると、廊下をへだててすぐ左手に大広間の入口があり、招待客たちが列を作っていた。招待主である日本大使出淵勝次が入口の内側に立っていて、客たちは順に出淵に挨拶をして会場に入るのだった。小柄な出淵の傍には、二人の背の高い若い大使館員が並んでい、出淵とともに客たちに会釈を送っていた。参事官の加藤外松と秘書官の寺崎英成だった。

グエンはそのときのことを、後に回想記に次のように書いてゐる。

「彼（寺崎）の大きな目は大そう黒く、輝いていた。私はその目が私に注がれているのに気づいていた。私たちはあたたかく迎えてくださった出淵大使と言葉を交わしてから、飲み物のパンチ・ボウルの置いてあるほうへ行った。すると間もなく、その若い日本人が叔母のところへ近づいてきて、話しかけた。叔母は青年と談笑を交わすと、私にこの方は寺崎英成という外交官だと紹介してくれたのである」

このとき、英成は二十九歳で、独身だった。彼が東京帝国大学法科から外務省に入省したのは、昭和二年十二月だった。翌三年、彼はアメリカ東部の名門校ブラウン大学に在外研修生として派遣され、英語学と英文学を一年間学んだ後、ワシントンの日本大使館勤務になっていた。もともと東京帝大時代に英法を専攻していたうえに、ブラウン大学に留学したことは、彼の英語をいちだんと流暢にした。

そのブラウン仕込みの英語で、英成はグエンに盛んに話しかけ、日本について語った。グエンもしだいに日本について興味を強くし、質問を重ねた。英成は欧米人にひけを取らない背丈と体格を持った偉丈夫で、グエンの第一印象の通り、目が大きく、眉毛は太く濃かった。強い個性と意志を秘めたその黒々とした目に、グエンはその夜なぜか心残りを感じつつ、日本大使館を後にした。

グエンが心残りを感じた以上に、英成はグエンに惹かれたようだった。グエンの彫りの深い目はどこことなく憂愁をただよわせてい、それでいてユーモアをよく解して快活に笑った。端正な唇がほころびると、白い歯並びが光った。髪は短くまとめられ、真珠のイヤリングが、耳もとから顎にかけてのふっくらとした曲線を一層瑞々しくしていた。

翌日、英成は日本について英文で書かれた本や写真、茶器とともに、後に二人の愛のシンボルとなる黄色い三本

のバラを、グエンに届けた。グエンの希望で、叔母が英成をお茶に招待した。ごく自然に二人の交際が始まった。英成はグエンを叔母の家に訪ね、あるいは散歩やドライブに誘った。

グエンは英成を「テリイ」と呼んだ。親しいアメリカ人同士がやるように、「ヒデナリ」あるいは「エイセイ」と気軽に名前と呼ぶには、発音しにくく、姓の「テラサキ」をアメリカ風の愛称に縮めたのだった。

英成は日本の歴史や文化、とりわけ半世紀余り前の明治維新と明治の元勳について、時にはまるで講義するような口調で、熱心に語った。グエンもついつられて英成がつぎつぎに持ちこんでくる本を読んでいた。

あつという間に三カ月ほどが過ぎて、年も変わっていた。冬が終ろうとしていたある日、英成はグエンに結婚を申し込んだ。

「私たちの結婚については、アメリカ人の中にも日本人の中にも、理解してくれない人が沢山いると思います。あなたのご両親にとつてもすぐには賛成しかねる事柄でしょう。まして私は外交官です。世界のどんな国へ赴かなければならないか、わからない。私たちは転勤のために、いつも見知らぬ人々や見知らぬ風習の中で暮らさなければならぬかも知れません。堪え忍ばなければならぬことに、何度

もぶつかると思います。しかし、私たちは一緒になってそうしたドアを通り抜け、窓を開いて行けると思うのです。どんなことがあっても二人で生きて行く——それ以上の代償はないと思うのです。グエン、『イエス』といってください」

グエンは英成の申し込みを心の片隅で期待していたにもかかわらず、その場で「イエス」ということはできなかった。彼女は「彼女はいざとなると混乱し、ためらった。『考える時間をください』そういうことしかできなかった。彼女は迷い続けた。英成に離れがたいまでに強く心を惹かれながら、結婚となると決心できない。なぜなのか。迷いと不安の理由は、いったい何なのか。もし結婚したら、私の名前は——「グエン・テラサキ」その名前の耳慣れぬ奇妙な響きに、グエンは愕然となった。もし自分がそう呼ばれたらと想像しただけで、顔が赤くなる思いがした。日本人との結婚、見も知らぬはるかな東洋の国に行くことになる結婚！ テネシーの小さな町で育った娘にとつて、それは巨大な壁のように立ちはだかった難問だった。

春がきて、叔母の家での予定の滞在期間が過ぎたため、グエンはジョンソン・シティに帰らなければならなくなった。夜行列車でワシントンを発つ夜、グエンは「駅まで送ってあげましょう」という英成の申し出を、快く受けた。

英成はグエンの荷物を自分の車に積みこんだ。グエンは目を合わせるのを、できるだけ避けていた。最後に一つ母へのみやげ物を忘れていたので、彼女は部屋にその包みを取りに戻った。窓際の椅子の上に置いてあった包みを取り上げながら、彼女は開かれた窓越しに表に目を向けた。車のドアの傍に立って待っている英成の姿が見え、月の光がその顔を浮き上がらせていた。不思議な感情が体内を走り抜け、それまで自分が「イエス」といえなかった感情よりも、「ノー」といえない感情のほうをはるかに強く大きいことを、彼女ははっきりと意識した。

車の中で、彼女はなおも押し黙ったままだった。懸命に感情を整理していたのだった。駅のホームで、いよいよ列車に乗る間際になって、彼女はとうとうそれを口に出して、はっきりといった。

「私は心を決めました。イエスです」

汽笛にせかされつつ、二人は手紙で連絡を取り合うことを約束した。

二人は頻繁に手紙を出し合った。夏になると、英成はいたたまれなくなつて、休日に夜行列車を利用しては、何度もジョンソン・シティを訪ねた。ワシントンから約五百キロ、片道十数時間の旅だった。

グエンの両親エルマーとバーザは、日本人との結婚話に、非常に驚いたが、英成が立派な青年であり、将来を嘱望された外交官であることを知って、交際には反対しなかった。ただ、心の中ではグエンが最終的に気持ちを譲^{ゆづ}ることを望んでいた。

問題が生じたのは、むしろ英成の側だった。

外交機密を扱う外交官の国際結婚は、日本の外務省では好ましくないものと見られていた。どこの国でも、大なり小なり同じような事情があるようだが、日本の場合、島国の単一民族として生きてきた独特の人種観や結婚観がからんでいた。とくに昭和に入つて、日本が軍事力を強め、欧米列強や中国との摩擦が多くなるにつれて、外交官の国際結婚は忌避すべきものであるとの考えが強くなつていた。特別の規則が作られたわけではないが、外国人を妻とするときには、本省の許可を求めなければならないという慣行ができていた。折しも日米関係は、険しいものになりつつあった。

ワシントンに早い秋がやってきて、英成が結婚の許可を大使に求めようと考へていたとき、極東で大事件が起こつた。

一九三二年（昭和六年）九月十八日夜、満州（中国東北部）の奉天（瀋陽）郊外にある柳条溝で起きた南滿州鉄道の線路